

Title	シャルル・エフ・ジャン 『最近の發掘より見たる前第三千年紀に於ける印度とスメル』
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.95(277)- 100(282)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャール・エフ・ジャン『最近の發掘より見

たる前第三千年紀に於ける印度とスメル』

間 崎 万 里

はしがき 表題の記事は『前第二十世紀より前第十三世紀に至るフェニキヤ』と題する記事と共にパリのルーヴル學院講師 シャール・エフ・ジャン氏の筆になり、近刊『ヨーロッパ文明』

(European Civilization: its Origin and Development, vol. I.

Prehistoric Man and Earliest Known Societies, ed. by E.

Eyre, 1934, Oxford Univ. Press)に附録として載つてゐるも

のであるが、最近八釜しかつたインダス文化に關する問題が、

マーシャル氏の大冊を讀むよりも簡單にその大要に通じ得るの

で、初學者入門としてこゝに譯載することとした。この發掘と

解説を分擔したマツケー氏の新著『インダス文明』(一九三五年

初刊四六版二一〇頁)は若干の寫眞も載つてゐるので之と併讀

するとよい。この譯文では原註は括弧に入れ、引用數字は誤植

をなるべく訂正して本文中に含ませ、圖版についても若干補記

して置いた。なほ濱田耕作氏『印度に於ける最近の考古學的大

發見』(歴史と地理第十五卷一號)井上芳郎氏『東洋文化の新報告

と世界の反響』(東洋昭和三年五月・六月號)後藤守一氏『モヘンジョダロの發掘』(史林第十五卷三號)松本信廣氏著『古代文化論』三〇—三四頁等をも参照せられたい。

『印度考古學調査局』はインダス河流域の、もつ

と精しく言へば、パンジャブ州のラホールの西南、

モントゴメリー區のハラツパ、及びタルカナ・シ

ンド州のハラツパから六百餘キロのモヘンジョ・

ダロに於ける發掘の指揮を局長マーシャル (Sir

John Marshall) 氏に委託したのである。その結

果は三冊の大本 (Mohajo-Daro and the Indus

Civilization, 3 vols., 1931) に収録せられ頗る興

味あるものである。

(譯註) 本書については史學第十一卷二號一六四頁に松本信廣氏の紹介がある。インダス河流域に於ける發掘はハラッパとモヘンジョ・ダロに行はれたが兩地の出土品は、後代に屬するものを除き何れも同一種類のもので、證據は擧げられないが前地が心持ち後地よりも古かつたらしい。そして後地は前地よりも狭少であるがそれでも一方哩の面積を占めてゐる。ハラッパはもとラヴィ河の河流異動の結果舊河床に出來た古市の廢址であるが、この地から動物と繪文字を刻んだ古い印章が度々發見せられた。この繪文字は、印度の婆羅門アルファベットの本源であることをサー・アレクサンダー・カニンガム氏が唱へ出し、ラングドン(Langdon)教授も今はこの説に賛成してゐる。

當初古印度の未知の文化を知るべき遺蹟としてはハラッパだけが知られてゐたが、この地は近年まで古い煉瓦の採收場となつてゐて、家屋建築物等のプランをはつきり知るのに好適でなかつた。それでマーシャル氏は、研究に都合よき遺蹟を他に求めてハラッパから西南五百餘哩の地即ちシンド語で『死人の丘』を意味するモヘンジョ・ダロに捜し當てた譯である。

その經過は次の如くである。一九二二年 R. D. Ranerji 氏はこの地に紀元一五〇年乃至三〇〇年間に建てた佛塔と道場を發見したが、その塔に使用した煉瓦はそれよりも二十六世紀も前のものを利用してあつた。又一九二二年のサーニ(Raj Bahadur Daya Ram Sahni)氏によるハラッパの發掘は同地が疑もなく

極めて古いことを證明してゐたのでマーシャル氏はこの報道を得て一層大規模の發掘を決意し、一九二三年から四年に亘る冬 M. S. Vats 氏を派遣して更に調査を遂げ、次の冬 N. Dike-Site 氏により新發掘を行はせ、翌一九二五年度の冬は出土品が多かつたので、マーシャル氏は人員を増し H. Hargreaves 氏及び Saha Diah 氏をその中に加へ、自身監督に出掛けて大いに成果を擧げた。

一九二六年秋前記のサーニ氏及び Ernst Mackay 氏が同處他の部分の發掘に當り、爾來一九三一年資力盡きるまで發掘をつゞけ、その調査研究はマッカーシー氏の擔任する所であつた。その間ハラッパに於てはヴァッツ氏により小規模の發掘が續けられ他方 N. G. Majumdar 氏はシンド地方を旅行して他の遺蹟を捜査し、同州の南は今日のハイダラバード市から北はジャコババードに亘る諸處に該文化の聚落が發見せられ、これ等がインダス河の現在の水路とメルチスタンのキルタール山脈山麓地帯の間に介在する丘陵の連鎖をなしてゐる。その中にはインダス文化の下層にもつと古い文化層を存することの證據が得られた。シンド州に於ける同文化の最初の發見地からアムリ(Amri)文化と稱せられるに至つたこの文化については餘り知られてゐないのであるが、その土器は形狀も、二色に塗られた幾何學的文様もインダス文化の土器とは異つてゐる。随つて之れを作つた民族も違ふのであらう。

一九二五年秋ハーグリーヴス氏は北ベルチスタンの Kalib 州 Kalib の大丘を探查してインダス文化との關聯の未だ決定し

ない一文化の證據を見出し、その二年後に *G. A. Stein* は南北ベルチスタンを旅行してインダス文化の入り込んだ痕跡を求めて夥多の遺物を發見した。

インダス文化の小聚落はシムラ丘から遠からざる *Rupar* に發見せられた。これらがハラッパのずつと東にも南にも出て來さうなので、マーシャル氏はこの文化がガンヂス河流域にまで擴がつてゐることを確信し、チャイルド教授の如きはこの文化はエジプト又はスメルよりも遙かに廣大な地域を占めてゐたに相違ないとしてゐる (*Ernst Mackay: The Indus Civilization, 1935. Pp. 1-6* によろ)。

この發見の小部分は是迄諸種の定期刊行物に發表せられてゐる。さうして特に同種類のスメル出土品と似寄つた若干の印章については寧ろ早まつた結論が下されてゐる。或る學者は印度とスメル間に關係のあることを斷定したのみか、更に一方が他方に依從してゐることを説き、或はもつとはつきり、印度はスメル人の發祥地であるといふことが主張せられた。

兩地に發見された若干の印章の類似性が斯様な

印象を起させることは否まれないが『モヘンヂョ・ダロ』第三卷の圖版の研究は非常に違つた考を與へる。インダス河流域の文明の比較から生れる最も顯著な事實は、兩者が正反對なることである。

印度の印に章示された卍字(註) (マーシャル氏註の『モヘンヂョ・ダロ』は數氏が分擔執筆してゐるので、以下引用頁の上へ、執筆者の名を併記することとする。同書第三卷第百二十四圖版第五〇〇—五一五號第二卷四) はクリート、カバドキヤ、トロイ、スーサ、ムシア (*Musha*) の出土品と似てゐるが、後者は何れもその本源地を確めることが困難である。この卍字がバビロニヤにもエジプトにも一つも見出されてゐないことは顯著な事實である (同書卷マツケイ)。

(譯註) 史林第十五卷三號三九〇頁第十圖にはナチス式ハイケンクロイツのみが載つてゐるが我國でお寺の印に使用する普通の卍字も數個出土してゐる。

有孔の把手の附いた丸い三個の印章 (同書第百二圖第三〇九—三三三) はド・サルゼーク (*De Sarzec*) のテ

出土品(ルイザル博物館發行『東方圖筒』)と形狀が似寄

つてゐるだけで、數個の他の印章は明かに異つて

ゐる。把手のないのも、刻み込みの把手のあるの

も、形狀が長方形である(『モヘンジヨ・ダロ』第二卷)。

それは恐らく神のシンボルであるらしい牛の格

好をした獸類が『非常に特有な形狀の秣槽(註一)に臨み

(圖版第三〇六、三〇八、三七一—三二六號)又は脚の附いた臺の上に載せ

た奉納物の前に居る處(註二)(圖版第一—三〇五、五三)を示し

た印章のコレクションであつて、その上部には繪

文字の銘(『モヘンジヨ・ダロ』第二卷第二十二章の中に Sydney Smith and O. J. Gradd 氏により假に分類されてゐる)

があつて、兎に角數個の印章の上には文字が同

じ符號を以て始まつて居り、もし之を左から右

へ讀むとしても(時には右から左へ讀む。そのときは動物が

符號がその方向を見てゐるからで、例へば、第六九號の人、第三

六號の鳥、又第三三八號の恐らく二羽の鳥の場合もさうである。

第三四三號は疑はしいが第一卷)是等はしばしば同一の符

號で終つてゐる(圖版第一〇五、一〇九、一三四、一四八號等)。文字が奉納

ある(第一卷マツケ)。今や同様の或は殆んど同様の印

章がスメル(一氏三一八頁)のテロ地方に發見された(Shell, Revue d'assyriologie, xiii (1925) 56 を見よ。しかしこの印章はマツケイ氏が暗示す)。

様な工合に實際 D. P. から將來したことは確かでない)

(譯註一) 史林第十五卷三號三九〇頁第九圖右上方の印章及び

マツケイ著『インダス文明』M圖版第十四圖がその例である。

(譯註二) 史學第十三卷一號口繪三個、マツケイ著『インダス文明』M圖版第十二號

サー・ジョン・マーシャル氏はこの印章(第一卷

七號、第十三圖版第十七號及び)について六七頁に記述し

七六頁、第百十七圖版第十六號)についで六七頁に記述し

た後、次の如く結論してゐる。『この類似は餘に顯

著なので變化した結果でも、獨立に進化した結果

でもあり得ない、或は又、兩者が兩地に知られて

ゐない共通の原型から生じたものであるといふ假

定に於ても説明がつかぬ』(同書)と。しかし事實

の上ではこの類似は私共にはこの點が顯著である

様には見えない。直接或は間接に一方或は他方か

ら借用しないでも、兩地に於て別個にヘラクレ

スの如き英傑を案出したかも知れないし又その傳説

が形成されうるはずである。

この繪文字の問題については、ラングドン氏は初めには、兩書體の依從關係を否定して『第一にこの書體はスメル又は原始エラムの符號との遠く離れた關係すらも決してあり得ない』(『モヘンジョ・ダロ』第二卷第二十三頁四)と言つてゐるが、その追記に於て(『同書四五』三三四頁)氏はこの意見を變更し、『この書體のスメルとの關係は『モヘンジョ・ダロ』中の繪文字の分類表と上の新比較の中に述べた多くの類似せる又は同一の符號によつて肯定される。それにスメルとインダスの書體とは何れも數を示す符號を綴字として自由に用ひて居り、兩者何れも右から左へ讀むことは顯著な事實である』と。

ガッド氏は之に反し、氏が以前發表した見解に敘及して『當時極く僅かの證據しか有してゐなかつたのに、我等は直ちに少數の綴字間の類似を説明しようとした。この暗示は一方では途方もない

悼しい結果をその儘受容され他方では暗示を斷言であると誤解して力強く反對された。その後の研究はスメル文字とインダス文字との間に何等かの直接關係を確認する傾向のないことを我等は躊躇なく容認するだらう』(『同書第二卷』四一頁)と。

或る繪文字は既知のスメル文字の若干のもの Ha. Gal 等(スメルの『魚』『大きな』)の如きに明確に類似してゐるが、印度には之に相當するものが知られてゐないので、それが何を表はしてゐるかについて相對的の結論をすらも立てることが不可能である。

スメル文明が多少インダス河に知られてゐたことは承認されようが、マツケー氏の記す所によれば、『彩色土器及びその他の物品はそれ等すべての間の關係を證明するけれども、印度が是等兩地に等しく熟知せられてゐたといふ明確な證據は存しない』のである。

インダス河の是等住民の人種及び言語については、何れも純然たる推測に止まるものである(同書卷四一)。

要するに、エウフラテスとインダス河の住民の間に關係のあつたことを否定することは、我等には困難に思はれる。スメル文明が古代印度の文明に影響を及ぼしたことを容認しても、過當ではないであらう。ツロー・ダンジャン(Fr. Thurau-Dangin)氏は一九二五年『アッシリヤ學評論』に『我等は印度のスメル文明を語るべき典據を有しない。況んや印度に於てスメル文明の起原を求むべきおや』(註) (コントノー(Contenan)氏は一九二七年その『東洋史』(方考古學提要)第一卷一一七頁に於てこの結論に同意を表してゐる)と。

(譯註) この反證も擧つてゐる(本號書評欄参照)。

我等の見解では、この結論は少しもその價值を失つてゐない(ツロー・ダンジャン氏は最近 Esquisse d'une histoire du système sexagesimal, Paris, 1932, pp. 141-5 に記して曰く、『一切はスメル文明は輸入されたものでなく固有のものであるといふ信仰に導く。スメル文化は具體的

にも精神にも何等感知し得べき外來の影響を)。
受付けなかつた。それは固有の文化である』と)。

追記 逸見梅榮氏の『印度文化の源泉』(岩波書店發行東洋思潮第九回配本の中)は大部分前記『モヘンジョ・ダロ』の巧者な抄譯とも見るべきもので、あの大著を縮圖の姿で見得ることとは洵に便利の上もないのである。拙稿には圖版を入れなかつたために手近かに見得る分のみを補記して置いたが、逸見氏のこの書中第十圖(三九頁)はマーシャル氏の圖版を原圖の番號その儘に第三二六號乃至三六一號が載せてあるので、この譯文中文字の讀み方の條と参照するのに便利である。拙稿送附後右書刊行のことを注意された松本信廣君に對こゝに謝意を表す。拙譯は同氏の記事と餘り重複してゐる様にも思はれないのでその儘掲載して置いた。併讀せられんことを。